

令和2年度

幼稚園教育研究



富山県教育委員会

目 次

<令和2年度研究の方向>

I	幼稚園教育課程研究協議会の協議主題について	
1	分科会協議主題と協議の視点について	1
2	分科会協議主題の分担について	2
II	2019年度幼稚園教育課程研究協議会報告	
1	第1分科会（国公立）	3
2	第2分科会（私立西部地区）	10
3	第3分科会（私立富山・新川地区）	17
III	令和2年度 幼稚園教育研究行事予定表	24
IV	令和2年度 各幼稚園教育研究会一覧	25

<領域「人間関係」について>

I	領域「人間関係」の考え方	26
II	日常の実践事例	28
1	ねらい（1）について	29
2	ねらい（2）について	32
3	ねらい（3）について	35

I 幼稚園教育課程研究協議会の協議主題について

富山県幼稚園教育課程研究協議会では、これまで、文部科学省から示された幼稚園教育理解推進事業（都道府県協議会）実施要項における協議主題に基づいて研究を進めている。この協議主題は、幼稚園教育要領の趣旨を踏まえ、幼稚園の教育課程の編成及び実施に伴う指導上の諸課題や幼稚園を取り巻く諸課題について理解を深めるため、提示されたものである。

令和2年度は、文部科学省から示された4つの協議主題のうち、富山県に分担された2つの協議主題について研究を進める。

1 分科会協議主題と協議の視点について

<協議主題2>

カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施する学校評価について

【協議の視点】

- (1) 各幼稚園が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や幼稚園運営の中核になることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとするとしている。カリキュラム・マネジメントと関連付けながら学校評価を実施するとは、具体的にはどのようなことか。

（協議主題の理解を深めるために必要な資料等）

○幼稚園教育要領及び幼稚園教育要領解説

第1章 総則

第6節 幼稚園運営上の留意事項

1 教育課程の改善と学校評価等

○「幼稚園における学校評価ガイドライン[平成23年改訂]」（平成23年11月文部科学省）

<協議主題4>

小学校教育との接続に向けた教育課程や指導方法の工夫について

【協議の視点】

- (1) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとするがあるが、連携と接続の違いを踏まえつつ、幼稚園教育要領で求められている接続を図るためには、今後、どのような工夫が必要となってくるのか。

(協議主題の理解を深めるために必要な資料等)

○幼稚園教育要領及び幼稚園教育要領解説

第1章 総則

第3節 教育課程の役割と編成等

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

○小学校学習指導要領及び小学校学習指導要領解説

2 分科会協議主題の分担について

分科会協議主題については、富山県国公立幼稚園・こども園教育研究会、富山県私立幼稚園・認定こども園協会が分担し、令和2年8月21日に開催予定の幼稚園教育課程研究協議会で発表する。発表園については、各組織において選出する。

分 科 会 協 議 主 題	令和2年度担当
<協議主題2> カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施する 学校評価について	<u>国公立</u> 私立（西部地区）
<協議主題4> 小学校教育との接続に向けた教育課程や指導方法の工夫について	<u>私立（富山地区）</u> 私立（新川地区）

* _____は、令和2年8月21日に開催予定の幼稚園教育課程研究協議会の発表担当

Ⅱ 2019 年度幼稚園教育課程研究協議会報告

1 第1分科会（国公立）

＜協議主題1＞

カリキュラム・マネジメントの適切な実施について

(1) 主題について

当園は「心身ともにすこやかで人間性豊かな子供の育成」を教育目標とし、幼児が安心して園生活を送る中で友達と関わり、主体的に遊びを進められるよう援助をしたり、環境構成を工夫したりして取り組んでいる。また、保護者や地域の方々の理解や協力があり、温かい見守りの中で幼児が育つ恵まれた環境である。

年々園児が減少し、現在5歳児8名、4歳児7名、3歳児8名の計23名が在籍し、昨年度から3・4歳児が複式学級となっている。教師が幼児一人一人の思いをしっかりと受け止め、状況に応じた細やかな援助をすることで、幼児はとても明るく、穏やかに遊ぶ姿が多くみられる。しかし、5歳児は自分の思いを友達に直接伝えようとせず、遠慮したり譲ったりと、友達と刺激し合って遊びを進める姿があまりみられない。そのため、友達と思いを伝え合い、関わりながら一緒に遊びを進める楽しさを感じてほしいと願い、同年齢だけでなく、異年齢児とも遊ぶ時間を大切に保育をしている。

そこで今年度は異年齢交流を通して、幼児が友達や異年齢児との関わりの中で、自分の思いを話したり、友達の思いや考えに気付いたりしながら、心を通わせるような体験を大切にしたいと考える。さらに、日々の活動において5領域のねらいを意識し、PDCAサイクルに基づいた保育の振り返りをしたり、教師間で幼児理解を深めたりしながら教育目標に掲げる幼児の姿に近付けるように保育をしていきたい。

(2) 研究の視点

- ① 幼児が友達や異年齢児と関わりながら、友達や自分のよさに気付き、互いに認め合えるようになるための教師の援助や環境の構成について探る。
- ② 教師間で幼児理解を深めるためには、どのような記録の工夫が必要かを探る。

(3) 実践事例

事例1 遊戯室で友達と一緒に遊ぼう（異年齢交流から）

＜5歳児の4・5月の姿＞

当園では、登園後から朝の集まりまでの間、遊戯室に行き異年齢で好きな遊びを楽しむ時間としている。教師も遊びに加わり、幼児と相談しながら大型積木やゲームボックス、巧技台を組み合わせ迷路やアスレチックをつくって遊んでいる。また、一輪車や縄跳び等にも挑戦し、「手を離して遠くまで乗れるようになりたい」「後ろ跳びを10回跳びたい」と自分の目的に向かって取り組む幼児がいる。5歳児は、3歳児に優しく言葉を掛けたり関わったりしているが、自ら遊びを考えたりつくったりする姿があまりみられない。また、困ったことがあると自分の思いを友達に伝えようとせず、教師に言いに来ることもある。そこで、教師は遊びの中で自分の思いを友達に話したり、関わったりして一緒に遊びを楽しんでほしいと考えた。

XI期（5歳児）	年長になった喜びや自覚をもち、友達と園生活を楽しむ
----------	---------------------------

5月のねらい 友達と一緒に遊びを進めていく楽しさを味わう。

P

活動のねらい 遊戯室で異年齢の友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

内 容 遊戯室でいろいろな遊具を使って、異年齢の友達と遊ぶ。

D 5月24日

4・5歳児と教師と一緒に空き箱にスポンジボールを当てる的当て遊びを楽しんでいた。5歳A児が空き箱の的を立てている途中に、ボールを投げってくる4歳B児がいたが、A児は何も言わずに立っていた。また、かごのボールが無くなっても拾う人がいなかったのも、教師が「かごにボールがないね。困ったね」と周りの幼児に声を掛けた。5歳C児と他数名が拾ってかごに集めていたが、たくさんのボールを拾うのは大変で、遊びが中断することが多かった。A児は的を立てるのが追いつかず、座りながら的を立てていた。

そこで遊んだ後に、遊戯室で3年齢が集まり、ホワイトボードに遊び場の絵を描きながら今の遊びを振り返った。教師が「遊んでいて困ったことはなかったかな」と聞くと「的当てのボールが飛び散って大変だった」「いろいろなところに転がっていた」と幼児は言った。「壁をつくれればいいんじゃない」と言う4歳D児の思いに「それいいね」とみんなが賛成した。しかし、A児はずっと下を向いていた。部屋に戻ってから5歳児だけで的当ての遊びを振り返ってみた。A児は静かに手を挙げて「的を立てないうちに投げる人がいて大変だった」と小さな声で話した。教師が「そうだね、Aちゃん大変そうだったね」とA児の思いを受け止め、周りの幼児に伝えるように状況を話した。するとA児は「今度は動款的にしてみたい。大きな段ボールに窓を付けて、そこからの的を動かすのはどう」と声が少し大きくなり、みんなの前で伝えることができた。それを聞いた他児は「いいね」と賛成した。

C

担任の反省・評価

教師間の振り返り・話し合い

- ・互いに刺激し合えるように異年齢交流の時間を大切にしているが、5歳児は全体の中ではまだ自信をもって自分の思いを話せない幼児もいることに気付いた。
- ・A児が伝えたい思いを話せる場が必要だと考え、年齢別の部屋で振り返ったことでA児が思いを話せたと思われる。また、教師が思いを受け止め、友達も興味をもって聞いてくれたことから、安心して自分の遊びのイメージを伝える姿につながったのではないかな。
- ・A児のように他の幼児も自信をもって思いを話せるように教師は一人一人の幼児の内面を理解し、その子に応じた関わりが必要なのではないかな。

- (遊び場の図や実践事例を基に話し合い)
- ・各年齢での振り返りも大切だが、3年齢で振り返ることで互いの刺激になる。年上の友達の遊びや話し合いの様子を年下の幼児が見ることで学びの場となっている。
 - ・A児が、友達が楽しく的当てで遊べるように自分からの的を立てる役になったことで、3・4歳児は楽しく遊べた。困ったときに思いを話そうとしないのは、恥ずかしさから人前で話すことに抵抗感あるためではないかなと思われる。
 - ・A児が年齢別の振り返りで話すことができたのは、教師がA児の思いを共感したことで、気持ちや和らぎ、伝えたい思いが高まったからではないかな。
 - ・遊び場の図や事例からでは、うまく幼児の思いや読み取りが深まらなかった。その場を見ていない教師にも伝えるように、写真を撮って可視化することが必要なのではないかな。

記録による振り返り（5領域より）

- ・月・週案や日々の記録、個人記録を見直し、月・週案の中にその月で育てたい5領域のねらいを記載する欄を設けた。また、記録をとった後、5領域の育ちが見えるように5色に色分けをした。（健康…緑色、人間関係…黄色、環境…水色、言葉…桃色、表現…紫色）
- ・異年齢交流の中で気付いたことを記録できるように各部屋に個人記録用紙を置くことにした。個人記録も5領域で一週間ごとに振り返る。

<月・週案より>

- ・朝の遊びでは異年齢児との関わりはあまりみられないが、教師が仲立ちとなり、少しずつ同じ場で体を動かして遊ぶことを楽しんでいる。(健康)
- ・5歳児に自分の思いや考えを表現しながら、友達と遊ぶ楽しさを味わう中で自立心や協同性を育てたい。そのために、自分もやってみたいという意欲や、やったらできたという満足感が味わえる遊びが必要なのではないか。(人間関係)

<個人記録より>

- ・A児は一輪車が大好きで積極的に取り組んでいる。しかし、初めてのことに對して緊張感を抱きやすく、友達との遊びでは自分の思いをあまり話そうとしない。しかし、動局的当てづくりをきっかけに言葉で伝える嬉しさや聞いてもらえる喜びを感じているようだ。(健康・言葉)

A

改善

- ・動局的や大きな窓をつくるなど、A児の思いやアイディアを5歳児で共有する場をもつ。
- ・5歳児が十分に的当て遊びを楽しめるように、場所と時間を確保する。
- ・異年齢での振り返りに加え、年齢ごとの振り返りも取り入れる。
- ・話し合いにおいて、遊びの様子を写真で振り返られるようにする。

事例2 5歳児で動局的当てをつくって遊ぼう (A児の姿から)

<A児の姿>

一輪車や鉄棒、縄跳びは積極的に取り組んでいる。絵を描いたり、製作したりすることが好きである。しかし、初めてのことはとても不安になり、人前で話すときは緊張しながら小声で話す姿がみられる。

P

活動のねらい 自分の思いや考えを伝えながら遊びを進めようとする。

内容 段ボールを使って、友達と一緒に動局的当ての遊びに必要なものをつくって遊ぶ。

D

5月27日

「動局的」と「大きな窓」をつくることになり、自分がつくりたいグループに分かれた。半数の幼児が「動局的当てをつくりたい」と言うと、A児は「私、窓をつくろう」と言って「大きな窓」のグループになった。教師は「Aちゃんは、動局的をつくらなくてもいいの」と聞くと、A児は「いいよ。だって、去年は段ボールカッターを使えなくて、切ってみたかったから」と笑顔で答えた。教師は、少し驚いたがA児の思いを受け止めた。

「動局的」では、E児が「的にボールが当たったら裏返しにして、泣いている絵にしたらどう」と話すと、みんなは「おもしろそうだね、そうしよう」と鬼やお化けの絵を描き始めた。

「大きな窓」では、A児が「ハロウィンみたいに楽しい絵を窓の周りに描いたらいいと思うんだけど」と友達に話すと、F児が「いいね、僕は星をいっぱい描くね」とクレヨンで描き始めた。

5月28日

「動局的」と「大きな窓」が完成し、つくったグループで交代に遊び始めた。途中で「窓の下と横からボールが転がっていく」「ボールが多すぎて拾うのが大変」などの思いが聞かれた。G児は「窓の下に草の段ボールを立ててみよう」と言った。「横も隠したいけど何かないかな」とみんなで探した。教師は「背の高いものがいいんだよね」と言うと、「段ボールでつくった木はどう」とA児の意見にみんなは賛成し、木を立てた。するとC児が「ボールが飛び散らないように周りを積木で囲もう」と友達と積木で囲い始めた。「ボールは小さいかごに入るだけにしよう」「かごに入れてみたら5個しか入らないから、5回投げたら交代にしよう」と困っていた部分をみんなで考えを出し合い工夫して遊んでいた。その様子を3・4歳児が何度も見に来ていた。そして午後の遊びの時間に「3・4歳児も呼んであげよう」と誘いに行った。遊び始めると、A児は3歳児に合わせてしゃがみ、目を見ながらルールを知らせていた。C児は手渡しでボールを渡すなど優しく関わっていた。遊んだ後に3年齢で振り返りをすると、5歳児は「ルールを教え

るのが難しかった』『『おもしろい』と言ってもらって嬉しかった」3歳児は「楽しかった」「またやりたい」4歳児は「おもしろかった」「僕たちも的を動かす役をしたい」と言った。次の日から3・4歳児が5歳児の係を真似て遊び始めた。3歳児に「これどうやるの」と聞かれ、A児とH児は「ここを持ってね」と動局的を持つ位置を優しく知らせたり、見守ったりしていたが、男児は違う遊びを始めていた。

C	担任の反省・評価	教師間の振り返り・話し合い
	・5歳児だけで遊びを進める時間を多く確保したことで、じっくりと遊びに取り組むことができた。その中で一人一人が困ったことや「もっとこうしたい」という思いを伝え、試行錯誤しながら遊びを進めていたと思われる。 ・A児は、半数の友達が「動局的」づくりを選んだことで、遠慮をして「大きな窓」づくりを選んだと思ったが、A児の姿から自分の思いを話していることが伝わった。 ・A児は自分から積極的に異年齢児に関わろうとはしなかったが、「動局的当て」の遊びを通して、異年齢児から頼られ、関わりをもてたことが満足感につながっているのではないかな。 ・本活動において、男児の遊びが続かない傾向にあったのはどうしてだろうか。	(写真を基にした話し合い) ・3・4歳児は、5歳児の遊びに取り組んでいる姿を見ることで遊びへの期待感が高まったと思われる。 ・A児が係の仕事を優しく知らせたことで3・4歳児は「動局的当て」の係も十分に楽しんでいた。 ・男児はこの遊びをつくることを楽しみ、5歳児だけで遊んだことと、3・4歳児に遊びを知らせたことで満足感を得られ、次の遊びに行ったのではないかな。
	記録による振り返り（5領域より） <月・週案より> ・5歳児が「動局的当て」遊びを通して、幼児同士が困ったことを伝え合えるようになったり、工夫したりする姿がみられるようになった。（人間関係） <個人記録より> ・A児は年齢別で話す経験を重ねたことで、自分の思いを少しずつ自信をもち、笑顔で話すことができるようになった。（言葉） ・A児は「動局的当て」の遊びで3・4歳児から頼られたことで、関わりをもつきっかけになり、遊びのルールや係の仕方を知らせる姿につながったと思われる。（人間関係） ※週の記録から「言葉」と「人間関係」に視点を当てているため、記録が偏っている。そこで、他の領域も意識しながら記録をとるようにする。	
A	改善 ・一人の思いからの遊びを広げることも大事だが、みんながやりたいと思える遊びは何かを探る。 ・共通の体験や共通のイメージをもって遊べるように環境を工夫する。 ・男児の思いを引き出すような関わりや言葉掛けをする。	

事例3 動物探しをみんなで楽しもう（親子活動の経験から）

<5歳児の姿>

6月8日に、5歳児は呉羽青少年自然の家で親子活動を行った。幼児の楽しかった活動「動物探し」「ターザンロープ」「いかだのり」「ザリガニ釣り」を写真を使って振り返るとともに、3・4歳児・保護者にも楽しかった思い出が伝わるように玄関に幼児の遊びの様子を掲示した。5歳F児が「3・4歳児の友達も遊ばせてあげようよ」と話すと、「そうだね、動物探しにしようよ」と全員が賛成し、遊びをみんなで進めた。

P	6月のねらい 友達と思いを伝え合いながら一緒に考えたり、試したりしながら遊びを楽しむ。
---	---

活動のねらい 自分の思いを話したり友達の思いを聞いたりしながら、友達と遊びをつくっていく楽しさを味わう。

内 容 動物探し遊びに必要な物を友達と一緒につくって遊ぶ。

D

6月10日

動物探し用の絵カードをつくるために、5歳F児が「先生、四角の小さい紙がほしい」「僕も」とみんなで描き始めた。A児が「一人1枚だと見付けるところが8個しかなくて少ないよね。だから2枚ずつ動物カードをつくったらいいんじゃない」と言うのと「いいね」とみんなは賛成した。5歳F児「ゾウって、どう描けばいいかな。図鑑を見てみよう」「Fちゃん、絵上手」「ひらがなが分からなかったら、ひらがな表を見たらいいよ」と友達同士で知らせ合っていた。

16枚の動物カードが出来上がると「どこに隠す」「親子活動では、廊下とロビーだったから、幼稚園の廊下と遊戯室にしようよ」と自分たちの経験したルールを思い出しながらルールを決め、友達とは違う場所に隠しに行っていた。5歳I児が「早く、みんなで動物探しをしたいね」と言った。

6月12日

朝からそわそわしていたI児は「早く、3・4歳の友達と動物探しをしたいね」と5歳J児と話していた。5歳児が3・4歳児の部屋へ行き、遊びのルールを話した後、3年齢のなかよしグループで動物探しを始めた。5歳児は、隠してある場所が分かっても知らせず、F児は「ここにありそうだな」と自分が隠したピアノの前で止まった。5歳児は3・4歳児にヒントを伝えて見付けやすいように関わっていた。5歳児が用紙に答えを書き、見付けるのは3・4歳児となっていた。すれ違うグループ同士で「10番の動物見付けた」と聞くと「見付けたよ」「どこにあった」「あっちの方かな」など話しながら探しているとあっという間に1時間が経ち、全グループが全部の動物カードを見付けることができた。

3年齢で遊びを振り返ると、どの幼児も「楽しかった」「見付けるのが難しかったけど、おもしろかったね」と満足気な表情だった。3・4歳児が「年長組さん、楽しい遊びに誘ってくれてありがとう」と言うと、5歳児は「どういたしまして」と照れくさそうに言った。5歳のみんなからは「またやりたいね」「今度はザリガニ釣りにしよう」「池ジャングルもおもしろかったから、二つともつくろうよ」と笑顔が見られた。

C

担任の反省・評価

教師間の振り返り・話し合い

- ・5歳児だけの親子活動の経験がとても楽しく満足感を味わったことで、異年齢の友達にも同じ感動を味わってほしい気持ちになったと考える。今までよりも、自然に異年齢の友達のことを思いやる気持ちが育っていると感じた。
- ・動物探しの共通のイメージをもちながら、絵カードづくりや絵カードを隠すなど、みんなで同じ遊びに取り組む姿から一人一人が目的意識をもっていると感じた。

- ・5歳児全員が同じ目的をもって遊びを進め、異年齢の友達が自分たちの遊びを楽しむ姿を見て、友達を喜ばせることができた充実感を味わえたのではないかな。
- ・この経験から、遊びを進める見通しがもてるようになり、次の遊びへの意欲につながったのではないかな。

記録による振り返り（5領域より）

<月・週案より>

- ・思い切り自然の中で親子活動を楽しんだ満足感から、園でも遊びを異年齢の友達にも体験させてあげたい気持ちになり、友達同士で遊びを進めようとする姿につながった。（健康・人間関係）
- ・友達と共通の目的を見出し、「動物探し」の遊びに向けて自分の思いを話したり、友達の考えに気付いたり、工夫したりしていた。また、共通の目的が実現できる喜びを味わい、自己を発揮できたことを教師や異年齢の友達に認められる体験になった。（人間関係）
- ・動物カードづくりや動物探しの中で、互いに思いを伝え合う楽しさを味わっている。（言葉）

・自分が描いた動物カードを遊びに使う楽しさを感じている。(表現)

<個人記録より>

・動物カードの枚数を決める中で、数に興味をもてた。(環境)

・遊びの中で文字を書いて伝える楽しさを味わっていた。(言葉)

・自分たちが経験した遊びのルールを思い出しながら、ルールを決め、異年齢の友達に自信をもって話していた。(言葉)

A

改善

・異年齢で交流する機会を大切に、戸外遊びや行事等でも幼児同士が関わりながら楽しく遊べる環境を幼児と話し合いながら設定する。

・活動や幼児に合わせた5領域の視点で観たり、記録を取ったりする。

(4) 実践より明らかになったこと

視点① 幼児が友達や異年齢児と関わりながら、友達や自分のよさに気づき、互いに認め合えるようになるための教師の援助や環境の構成について探る。

- ・異年齢交流の中で教師は幼児の内面を探り、思いを受け止めることが大切である。幼児が安心して思いを話せるよう配慮することで、幼児が自信をもって話せるようになると思われる。幼児の実態からその子に応じて同年齢での遊びや活動の時間や場所を十分に確保することも必要である。(事例1)
- ・動動的当て遊びを異年齢で遊んだ経験から、3・4歳児が5歳児の姿を見て真似るなど、互いのよい刺激につながっている。幼児が友達のよさに気付いていることを、教師がその子の気持ちを引き出し、言葉で返すことで次の活動でも認め合う姿につながると考える。(事例2)
- ・写真を活用し、5歳児が体験した親子活動を振り返ったことで、心から楽しかった体験がよみがえり、5歳児で共通の思いやイメージをもって遊びを進めようとする意欲につながった。自分たちの考えた遊びを3・4歳児が楽しく遊ぶ姿から、5歳児の自信や次の遊びへの意欲、自立心につながると考える。(事例3)

視点② 教師間で幼児理解を深めるためには、どのような記録の工夫が必要かを探る。

- ・各部屋に個人記録用紙を置き、教師が幼児の遊びや生活の中での気づきを記録したものを週末に教師間で振り返り、新教育要領を基に5領域で色分けをし、考察をしたことで幼児の成長の気づきや手立ての改善につながっている。(事例1)
- ・写真を基に幼児の遊びを振り返ることで、教師間でその場面を共有でき、幼児との遊びの振り返りと合わせながら幼児の内面の思いを探る手立てとなる。(事例2)
- ・5領域の中の「人間関係」「言葉」を意識して幼児に関わり記録したことで、幼児の育ちへの具体的な手立てとなった。しかし、遊びや活動により、教師が意識してみる5領域の見方で偏りが出てくることもある。(事例2・3)
- ・「動物探し」の遊びを幼児の姿から振り返ると、いろいろな経験が重なっており、総合的な遊びであることに気付いた。継続しやすく分かりやすい方法で記録を取り、一目見て5領域が分かるように5色で表すことで自分の保育を振り返り、次の活動のねらいや幼児一人一人への援助につなげていくことが大切である。(事例3)

(5) 今後の課題

幼児が興味や関心をもった遊びから異年齢児とも関われるよう、今後も教師間で連携を図りながら遊びや生活の場を戸外にも設定していきたい。また、幼児が主体的に遊びを進めようとする姿を見逃さず、遊びのねらいや指導計画を擦り合わせ、教師間で共通理解をしながら保育をする。そして、PDCAサイクルで繰り返し取り組み、教育目標にあげる心身ともにすこやかな子供の育成に努めていきたい。

(6) 協議の概要

① 質疑応答

Q：写真や付箋を利用して保育を反省、評価、改善する中で、工夫したことは何か。

A：臨時職員にも記入してもらうことにより、担任が気付かなかった幼児の姿や関わりについて知ることができ、幼児理解につなげることができた。

Q：月週案の5領域の色分けは、立案時か、立案後か。

A：月週案は立案時に5領域に分け、月のねらいや活動を考える。週のねらいは月のねらいのどこに位置付いているのかを明確にする。記録は週のねらいに対して記入している。個人記録はその幼児の月のねらいを意識しながら記入し、その後5領域に分けている。

Q：教師間の話し合いについて、どのような工夫をしているのか。

A：月初めに月週案を持ち寄り、全教師で幼児の成長や興味・関心は何かを話し合う。月週案の記録や個人記録は、記入後回覧し、全教師が見ることができるようにする。毎週末に月週案の記録から、幼児の成長に加え、遊びや活動の共通理解を図る。

② 協議内容

- ・記録や写真等を使い、保育を可視化して振り返ることが効果的である。5領域に分け記入することで幼児の実態が捉えやすくなる。
- ・記録は園長を含め全教師で回覧し、情報を共有することで、その後の連携が円滑になる。
- ・園の規模により、教師間の話し合いの時間の確保が難しく、各園における工夫が必要である。

(7) 指導・助言

一人一人のよさが生きるような保育計画作成に向け、環境構成や教師の指導の工夫について、5領域のねらいを意識したPDCAサイクルに基づいて改善していくことが大切である。日常の遊びや記録からみえてきた幼児の実態を教師間で話し合いながら様々な改善を図り、次の活動に生かすことが、幼児の発達に応じた適切な指導につながる。

視点①について

- ・少人数の園であることを生かし、意図的に異年齢の幼児が一緒に活動する時間と場所を設定するとともに、5歳児が積極的に活動する姿が少ないという実態を踏まえ、5歳児が活躍できる場を用意することは、自信をもって活動する姿につながる有効な手立てである。
- ・教師が意図的に友達のよさを紹介したり、一人一人のよさが明らかになるような活動を仕組んだりすることで、幼児は思いや考えを出し合いながら、自分に合った遊びを進めることができる。

視点②について

- ・話し合いや記録による振り返りが蓄積されることで、幼児の実態や改善への有効な手立てがみえてくる。また、5領域の視点から育ちがみえるように月週案を色分けし、振り返りを行うことで、バランスよく幼児の育ちを支えることができる。月案、週案、個人記録から5歳児に足りない育ちや一人一人の特徴、活動への意欲を把握し、次の活動に生かすことが大切である。
- ・写真を通した幼児理解や掲示による情報発信は、幼児の表情や場の様子がよく分かり、効果的である。
- ・今回は、幼児の実態把握を基に、5領域の「人間関係」と「言葉」についての育ちが多くみられる実践となった。引き続き他の領域での子供の育ちがみられるような活動も計画し、幼児の姿を見取っていくことで、育ちを確かなものとし、発達に応じた適切な指導につなげていくことができる。